

4 科目概要・取り組みと改善点（講義・演習科目）

2年生

科目名	看護と関係法規	科目責任者名	中田 芳子	対象・開講時期	2年生・後期
実施状況					
<p>看護と関係法規は、日本国憲法をはじめ、看護について規定している保健師助産師看護師法を中心に学ぶ科目である。法律というと硬いイメージを持つが、身近な生活すべてが法律で規定されているところから、身近な法律について課題を提示し、グループで話し合うところから始めた。</p> <p>また、労働関連の法律についてはその分野の外部講師を依頼し、後半には医療紛争を主に担当している弁護士の方2名で、看護に関連する守秘義務等について講義していただいている。</p> <p>講義終了後の2月ごろ、希望者には裁判の傍聴の機会も設けていただき、身近に法律に接する機会となっている。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>項目別回答では、全体に平均より高ポイントであり「Q19 授業全体の目標が明確であった」4.71、「Q20 この授業で学問的興味がかきたてられた」4.60、「Q20 この授業を受けて満足した」4.58であり、学生として難しく考えがちな科目であるが学びが多かったことがわかった。</p> <p>教材については、できるだけポイントをしぼって、資料を作成しながら授業を進めた結果、「Q12 教材は適切だった」は4.55であった。</p> <p>堅苦しいからと敬遠しがちな法律が実は身近な生活の中で生きていることを理解してもらいたいという目標は達成できたと考えます。「Q15 教員の話し方、声の大きさは聞き取りやすかった」は4.71、「Q16 私語の対処等、教員は静かな環境を保つよう十分に配慮していた」4.72、「教員のこの授業に対する熱意が感じられた」4.71であった。</p> <p>自由記載では「弁護士の講義が面白かった」「日程があわなかったので行けなかったが、裁判の傍聴を試みたかった」があり、次年度も外部講師の講義や裁判の傍聴の機会も設定していきたい。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>今年度の授業の組み立てや課題については、次年度も同様にしていく。可能な範囲でグループワークを取り入れて、様々な法律に関心が持てるような授業の工夫をしていきたいと考えている。外部講師に関しても専門家の視点からの講義は、興味深いようなので引き続き依頼していく。</p> <p>なお、次年度から教材として使用しやすいテキストに変更する。</p>					
学生への要望					
<p>看護師としては保健師助産師看護師法の理解は必須なので、この科目をとおして正しく理解してほしいと考えています。また、法律は日常生活を送る上でも、看護師として働くうえでも知っておかなければならないことがたくさんあります。身近な生活の中から法律について考えることから始めますので、提示された課題はしっかり取り組んでください。</p> <p>また、国家試験にも最近では法律の問題もどうか傾向にあります。過去問題から傾向を把握して講義しますので、必要な法律に関しては、授業の中でしっかり理解しておいてください。</p>					

科目名	社会福祉論	科目責任者名	岩田 香織	対象・開講時期	2年生・後期
実施状況					
<p>第1講 社会福祉の理念と変遷／第2講 社会保障と社会保険／第3講 障害者福祉施策のとらえ方／第4講・5講 子ども家庭福祉の実際／第6・7講 医療福祉の実際／第8講 高齢者福祉施策のとらえ方以上8講を、3人の教員がオムニバス形式で講義を行い、筆記試験により達成度を確認した。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>今年度より、3人体制による講義となったため、より多様な話題、事項を講義に盛り込むことができた。</p>					

講義内容には、今日的な課題を取り入れるとともに、看護と社会福祉の連携と協働の重要性、有意義性を意識し、受講生にこうした視点・考え方をもつ契機を提供できるように心がけた。
これからの授業に対する目標
<p>今後も、看護・社会福祉の接点における最新的话题を取り入れ、社会情勢に対する関心を喚起するとともに、将来の看護・福祉の連携の必要性を感じてもらえるように、基礎知識、基本視点の提供に努めていきたい。</p> <p>受講生の学習理解度、到達度をきめ細かく確認し、担当教員間でも目標を共有するなど、オムニバス形式講義のメリットを生かすように取り組んでいく。</p>
学生への要望
<p>受講生自らも、社会福祉を学ぶことの目的と意義を自覚し、自分自身の生活との関わり、看護職としての連携の重要性を意識して、主体的に学習する態度を持ってほしい。筆記試験によって理解度・到達度を計ることから、教科書、配布資料等の丁寧な確認が望まれる。</p>

科目名	臨床薬理学	科目責任者名	村山 千恵子	対象・開講時期	2年生・前期
実施状況					
<p>臨床薬理学では、薬物を用いて病気の診断・治療を行う場合に必要な基礎的・臨床的知識を習得する目的で、薬物の作用・効果・使用法、また同時に副作用などを取り上げて解説している。全体カリキュラムから推測すると、学生は薬物の基礎知識がないまま、いきなり臨床薬理学を学ぶことになるので、本科目では薬物の基本構造および作用機序（化合物構造相関など）に重点をおいて解説した。薬物名は、臨床病態学で学習することを前提として必要最小限に留めた。配布資料は学生の興味を喚起するためイラストを多用しカラーとした。テレビCMで流れている薬・報道で取り上げられた薬については、”Episode”として取り上げた。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>項目別回答では、「Q7 自分で調べ考える姿勢がもてた 3.66」と「Q18 この授業はわかりやすかった 3.76」が全体平均より目立って低かった。時間数に制限があり、あれもこれもと詰め込み過ぎた授業内容が原因と考える。「Q17 教員の熱意 4.34」および「Q16 教員の授業環境への配慮 4.25」は全体平均より少し高く、授業に対する熱意と私語に対する毅然とした態度は理解してもらえたようだ。</p> <p>自由記載では「薬理はすごくむずかしいけど、先生のおかげで分かるようになり楽しかった」「詳しい所までよく教えてもらった」また一方「詳しくすぎて内容が難しかった。要点をしぼって話して欲しかった」等の意見があった。学生にとって初めて耳にする情報が多く、「ヘー」という声を耳にして興味喚起作戦は成功した感はあるが、あれもこれも学生に伝えたいという教員自身のテンションの高さに共鳴した学生、ついてこれない学生がいたのも事実であった。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>薬物全般をカバーしようとしたため、授業時間が足りなくなり、どうしても一方的な講義となってしまった。解説対象薬物をさらに基本的なものに絞り、もっと余裕をもって学生と対話形式（学生の反応を見て臨機応変に）で授業を進められるように工夫していきたい。</p> <p>長期間（15回）にわたって催行されるので、学生の授業に対する理解度・要望を早い段階で、教師側が把握して、以降の授業方針に反映させられれば、学生にとって真に有益な授業が実現すると考える。</p> <p>シラバスについては、もっと授業内容を反映するような内容（具体的な薬剤名を明記するのも内容把握に役立つ）にして、実際に学生の理解の一助になるものにしていきたい。</p>					
学生への要望					
<p>クラスによって違いはあったが、私語に対して注意しなければならなかった回数が多く残念だった。臨床現場で看護師が「薬剤」に関わる機会と責任は、看護学生が今、想像している以上に大きい。また近年のジェネリック医薬品の普及により、薬剤の一般名（および作用機序）の知識が求められるよう</p>					

になっている。「くすり」の基礎知識を学ぶことができるのは、この授業が最後です。そしてここで得た知識は将来きっと役立つことと思う。

科目名	臨床病態学Ⅲ	科目責任者名	灰田 宗孝	対象・開講時期	2年生・前期
実施状況					
<p>本講義は、主に外科系のトピックスについての講義を、主として医学部の先生に担当してもらっている。従って、オムニバス形式となるので、各講義間のつながりは薄い。学生さんから試験範囲が判りにくいとの意見があったが、各講義担当者が出題しているため、講義の中で重要な点を強調するよう依頼している。つまり、授業を良く聴いていないと、どこが重要か判らない可能性がある。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>オムニバス形式のもつ利点と弊害が出ていると理解している。本来なら、一人の教員が一貫して行う事が望ましいが、医学系の専任教員は他の医学基礎科目の講義があるため、時間的に余裕がない。</p> <p>そのため医学部の教員に依頼していることから、現在の形式となっている。教科書を指定し、その中から講義をしてもらい、試験もそこから出題する形式が良いと思われるが、現在講義でカバーしている範囲は、一冊の教科書では収まらず、何冊にも成るため、教科書は使用していない。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>看護師として、広く浅く外科系の知識を獲得して欲しい。そのために、各講師には授業のメリハリを付けて、判りやすい講義を行うよう依頼する。</p>					
学生への要望					
<p>各講師の話を良く聞き、その中で何が重要かをしっかり理解する事が大切。そうすれば、自ずから試験の出題範囲も検討がつくものと思われる。試験直前に、何ができるのか聞きに来る学生がいるが、そのような事を答えられる訳が無く、全くむだな行動である。各講義のノートをしっかりと見直し、理解して欲しい。</p>					

科目名	臨床病態学Ⅳ	科目責任者名	二葉 千鶴	対象・開講時期	2年生・前期
実施状況					
<p>人間の「個体」という概念を病態学の視点で捉え、病気の原因や病気の形病態と機能や代謝の変化について環境への適応と関連づけて理解し、疾病の成り立ちの概要と治療・予防について学習する。</p> <p>この科目では①出生前の疾患と治療、性・生殖機能の障害（産婦人科疾患）、②小児の疾患と治療、③整形外科的疾患と治療、④感覚器官の障害と治療（眼疾患科、耳鼻咽喉系の疾患、皮膚疾患や口腔・歯牙疾患）、⑤東洋医学について学ぶ。授業では医学部の非常勤講師による講義によってより専門的に理解を深める。また、この科目は広範囲に及ぶが、重要な科目であり、重要項目を中心に系統的な学習を進めていく。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>学生への授業アンケートは平均 4.31 ポイントであった。項目別回答を取り上げると「Q6 授業で扱った分野に関する基本的な知識が得られた 4.45」、「Q18 この授業はわかりやすい授業だった 4.48」、「Q21 この授業を受けて満足した 4.50」と高評価であった。講義は科目責任者だけでなく、東海大学医学部附属病院より各分野の専門家に講義を依頼し展開した。各分野のエキスパートから基礎知識から最新の医学まで講義を頂き学生にとっては大変素晴らしい経験となった。</p> <p>その反面、専門性が高く理解が難しい授業もあった。資料作りや定期試験の出題方法など、より改良をしていきたいと考えている。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>臨床病態学Ⅳは産婦人科学、小児科学、整形外科学、耳鼻科学、眼科学、皮膚科学、口腔・歯科疾患、東洋医学を学ぶ。ここでの学習が臨床に直接結び付く分野である。看護師国家試験対策だけでなく、臨床現場に必要な基礎知識を身に付けられるよう工夫をしていきたい。資料についてもより理解を深めるものに改良していきたい。さらに、予習や復習を通し自己学習を促す方法を構築していきたい。</p>					

学生への要望
授業の予習や復習を通し自己学習を充実させ、より深い理解を得られるよう努力してほしい。この科目の理解が、これから始まる臨床現場での学習に大いに役立ちます。

科目名	看護倫理	科目責任者名	久保 典子	対象・開講時期	2年生・後期
-----	------	--------	-------	---------	--------

実施状況

看護倫理は、まず、良い事とはどういう事か学生に問いかけた。具体的には、授業の代返を頼まれたときに、あなたはどうすべきかといった出来事を例に、倫理的な問題は日常にもあるということに触れた。また、倫理に関する看護職の役割と、看護師としてどのように行動すべきかという行動規範について、日本看護協会の「看護者の倫理綱領」について説明しながら、テキストの事例を基に考える時間を設けた。

各回の講義での「今日一番印象に残ったこと」をリアクションペーパーに記入するようにし、学生の反応を確認した。心に残る看護師の対応についてなど、学生の率直な考えを知る手がかりとなった。講義の後半2回分は事例検討を行う時間を設けた。臨床倫理の4分割法を手掛かりにグループワークを行い、それぞれが選んだ事例について対処の方法について検討をすすめた。最終的にグループの代表者が検討内容を発表し、すべての学生がそれぞれの考えを共有できるよう心掛けた。

教員自身の授業評価

授業評価アンケートでは、概ね高評価を得たが、「Q14 質問や相談ができるよう配慮されていた 4.45」は、リアクションペーパーへの教員のコメントが学生にとっては配慮を受けたと感じる要因になっていると考えられる。「Q5 自分にとって新しい考え方、発想がもてた 4.48」は、事例を通してグループで検討したことが功を奏したと考えられる。学生の思考過程を大切にしたい授業展開を今後も心掛けたい。

これからの授業に対する目標

看護者の倫理綱領や国家試験に関連する重要な語句について説明する際は、教科書の内容に即して授業を進めたため、学生からは教科書の丸読みでつまらない、眠くなるといった反応もあった。今後は、単調にならないような工夫が必要であろう。例えば、倫理綱領を学生にマイクを使用して音読してもらい、区切りごとに順番にマイクを回すなどして、学生に役割が頻回に当たるようにする。さらに、わからない文言は何かリアルタイムに尋ねられるようにするなど、学生が発言する機会をもっと増やしていきたい。

教員の体験をもっと聞かせてほしいという要望があったため、教員の体験や教科書に載っていないこともさらに講義に盛り込みたいと考える。

学生への要望

シラバスに提示した教科書の内容をよく読んで、書いてあることの意味を深く探求しましょう。

講義の時に看護者の倫理綱領について触れますが、わからない用語は自分で復習して確認しましょう。

また、授業で紹介した本はどれも自分の考えを豊かにしてくれる内容です。学ぶきっかけは差し上げますが、実際に読むなどの行動を学生のみなさんが起こしてみななければ始まりません。

科目名	看護の実践	科目責任者名	蔵本 文乃	対象・開講時期	2年・前期
-----	-------	--------	-------	---------	-------

実施状況

看護の実践は、看護アセスメントⅡに引き続き看護過程の後半部分、看護問題の明確化から具体策、実施、評価・修正を行う。学年をまたいで看護過程を学習するため、1年次の続きであるという理解ができない学生が多いので、つながりを意識して学習する。看護過程の後半部分の一連の流れについてマイコプラズマ肺炎の事例を用い講義を行い、その後演習で、急性骨髄性白血病の事例を用い実際に展開する。

演習は、展開する問題点をグループで取り上げ、基本的には個人で考え提出する。具体策の実施はグループで行う。患者は看護上の問題をいくつも抱え、同時進行でそれについて看護していることを意識づけるために、最後にはグループをシャッフルし、それぞれ取り上げた問題点と実施した看護について発表する機会を設けている。

<p>アセスメントⅡと同様に課題が多くなるため、学習計画が立てられるように課題の提出日を学生に示している。また、教員は、学生の課題には必ずコメントし、一緒に頑張る姿勢を見せている。</p>
<p>教員自身の授業評価</p> <p>項目別回答では、平均より低い項目はなく多くの項目が 4.7 以上であった。「Q9 シラバスは役立った」が 4.42 と一番低く、「Q8 授業の学習の到達目標は達成できた」が 4.58 と次に低かった。シラバスは、オリエンテーションで使用し活用方法についても説明を行っているだけである。全体平均でも一番得点が低いため、学生に意識づけを行う必要がある。学習の到達目標の達成は低めではあるが、「Q3 授業にまじめに取り組んだ 4.83」「Q5 自分にとって新しい考え方、発想がもてた 4.78」「Q21 この授業を受けて満足した 4.78」の 3 項目が全体的にも高く、学生の満足度や達成感はあると考えられるので、本科目の到達目標の意識付けを行う必要があると考える。</p> <p>具体策の実施は初めてであるため、前年度の VTR と見せてイメージ化を図ったり、実際に実施しているところを VTR で振り返り、実施の評価・修正をしているが、自由記述にはそれに対する評価も認めた。その他に、達成感があった、辛かったけど乗り切れたという記述、GW で学びが深まったり、助けあえたという記述、指導がわかりやすかったという記述が多かった。一方でコメントが何も無いところが正しいのか分からないという記述もあったため、課題に対しては、コメントだけではなく、全体的に理解できるように内容の説明を行う必要がある。アセスメントⅡと同様に「Q17 教員の熱意 4.77」「Q14 質問や相談ができる 4.74」という得点から、演習を担当した教員の丁寧な対応も学生の満足につながったといえる。</p>
<p>これからの授業に対する目標</p> <p>今年度の授業評価は割と高い得点を示したが、わかりやすい説明、わかりやすい教材の使用を心掛ける。また、学生が質問できる環境、演習を担当する教員と情報交換を行い、コンセンサスを得て指導にあたる。後期からは、各領域で看護過程の展開を行うため、各領域とも繋がりを持ち、乖離がないように授業を構築する。</p>
<p>学生への要望</p> <p>課題は大変だと思いますが、看護師として臨床の場面に立つとき「その人に合った（必要な）看護」が実践できるように、その先にいる対象のことを考えながら取り組んで下さい。そして、看護を実践する事の本当の楽しさを少しでも感じて欲しいと思います。</p>

科目名	看護の基本技術Ⅱ	科目責任者名	千葉 美果	対象・開講時期	2年生・通年
実施状況					
<p>この授業では、健康の段階やライフサイクルにかかわらず検査・治療時に共通する基本的な技術について理論と演習を通して学習する。実際に病院等で使用されている器具を用い、よりリアリティーのある授業・演習を行っているが、ただ、技術を提供できれば良い訳ではなく、その技術の提供を受ける対象者の視点に立って考え、安全・安楽を意識した技術提供を行えるよう、常に問いかけを行っている。また、最終授業内では自分たちはどのような看護を行っていきたいのか、看護の基本技術Ⅱを通して学んだことを踏まえたグループワークを行っている。</p> <p>この授業の大きな特徴の一つは、学生同士で執り行う人体採血である。演習にも多くの時間を割き、学生が自信を持って技術を提供できるよう、i-Pad を用いた振り返り学習を取り入れ、学生の気付きを尊重できるような教授方法を取り入れている。また、人体採血は必須技術ではないことも学生に告知し、少しでもストレスが緩和できるように配慮を行っている。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>この教科は全般的に高評価をいただいている。しかし、毎回の演習時には課題を出しているにもかかわらず、授業時間外の学習時間は1時間未満から0時間と回答した学生が回答者全体の50%以上に及んでいる。取り扱う内容・技術ともに範囲が広いため、学習方法が分からないこともあるかもしれないが、課題の出し方の検討は行わなければならないと考える。また、Q7、Q20の項目点数が全体ポイントよりも低値</p>					

<p>だったところも学習方法・時間に大きく影響すると思われるため、学生自身が自立的に学習していける方式を検討していく必要がある。</p> <p>学生の自由意見としては、演習を通しての学びが大きかったとあったため、今後も授業と演習内容の関連付を意識し授業を進めていきたい。</p> <p>例年、この授業を受けると「看護師に近づけた気がする」と学生が発現することが多い。学生の出来たという思いにより添えるよう、今後もより一層の工夫をしていきたい。</p>
<p>これからの授業に対する目標</p> <p>学生が、この看護の基本技術Ⅱに感じている「看護師に近づいた」という感覚は大切にしつつ、なぜこのケアが必要なのか、なぜこれを行うのかを問いかけることは持続させていきたい。ただ、技術を提供できれば良い訳ではなく、その技術の提供を受ける側の立場になって考えられるよう、授業・演習内での問いかけを今以上に行っていきたい。また、学習時間に割かれる時間が少ないということも明らかになったため、予習的学修の方法を、ただ書き写せばよいものから、「なぜそうなるのか」根拠を考え演習内で疑問を解決していけるような方式—受動的学習ではなく、能動学習への転換を考えていきたい。</p> <p>授業の内容によっては、一方的な教授方法になってしまうものもあるため、学生が自主的に考えられるような参加型授業を多く取り入れ、学生の学問的興味と満足度を高められるような授業を提供したい。</p>
<p>学生への要望</p> <p>一回一回行われる授業・演習は貴重な経験につながるものになります。ただ、技術が提供できれば良い訳ではなく、それを受ける側の立場に立って考え、安全で安楽な技術を提供するには何が必要かを考えていってほしい。この授業の演習は、事前学習が必須です。自分の学習結果がどのくらい演習時に役立てられるか考え、しっかり自己学習を行ってください。</p>

科目名	健康の段階と看護 基礎技術	科目責任者名	端山 淳子	対象・開講時期	2年生・前期
実施状況					
<p>病気の経過は、その病気や合併症の有無などにより異なるため明確に分類することは難しいが、この授業では、「健康の段階」として慢性期・急性期・リハビリ期・終末期に分類し、それぞれに応じた看護の特徴、看護の機能や役割について学んでいる。また、学生がイメージできるような動画や教員自身の体験の話等から、病気を抱えて生きることとはどのようなことなのかを考えるために授業内レポートを課し、患者を全人的に捉える視点の形成を目指している。</p> <p>さらに科目では一部の看護技術（BLS・心電図・止血法等）を教授しているが、そのうちBLS・心電図の看護技術については、伊勢原校舎のスキルラボにて、実践的な演習を行っている。特に一時救命処置は技術テストを実施し、全学生が確実な技術を習得することを目指している。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>項目別回答で、最も得点の低かった項目は、「Q7 自分で調べ、考える姿勢が持てた 4.47」であった。</p> <p>授業を通して、特に課題は課しておらず学生の自主性に委ねていたが、今後は自己学習を促すような課題について検討していく必要がある。</p> <p>「Q18 この授業はわかりやすい授業だった 4.75」「Q21 この授業をうけて満足した 4.75」の得点は全体平均より高かった。自由記述には、「自分の経験をたくさん話してくれたことがよかった」「臨床の話をしてくれて理解が深まった」との記述があり、今後も学生が臨床での患者さんの様子や行っている看護がイメージできるような教授を行っていきたい。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>今後も、映像や臨床での話を盛り込み、学生の興味を持てる授業内容について工夫を行っていきたい。</p> <p>また、さらにわかりやすい授業にしていくために、教授内容の精選を行っていきたい。授業では国家試験問題も取り上げ、今、自分の学習していることが、国家試験にも直結していることを意識する工夫を行</p>					

っている。学生の意欲を高めるためにも、それらの取り組みも継続していこうと考えている。

今回の結果では、授業以外の学習時間が1時間未満33名、0時間25名という結果であり、項目別回答の「Q7自分で調べ、考える姿勢が持てた4.47」の得点の低さと相関していたため、自己学習の時間を増やすような課題の提出を視野に入れていきたい。

学生への要望

この科目で学習した内容は、病気を抱える、あらゆる対象を看護する上での土台になります。イメージしやすい映像や臨床での話もしていきたいと考えているので、1回の授業を大切に、「病気とともに生きる」患者さんについて考えて行きましょう。

また、看護と関連の深い「病気」や「障害」に対する社会的なとらえ方、考え方は、時代と共に変化しています。日頃から新聞や本を読み、社会に関心を向けられる看護学生になってほしいと願っています。授業でもそれらに関する意見を述べる課題を出すことを考えていますので、しっかり取り組んでいきましょう。

科目名	成人臨床看護 I	科目責任者名	丹澤 洋子	対象・開講時期	2年生・前期
-----	----------	--------	-------	---------	--------

実施状況

手術は、生体に対して意図的に損傷を加えるものであり、患者は手術という侵襲を受けたことで、生命の危機や心身の苦痛状態にさらされる。周手術期(術前・術中・術後)に患者が体験するであろう心身の変化や様々な問題を予測し、順調な経過がたどれるよう、周手術期における患者の看護に必要な基礎知識と技術について講義・演習をした。周手術期にある人の理解として、手術体験に対する心理的反応と手術侵襲に対する生体反応について学び、その後は周手術過程として術前・術中・術後(術後回復期を含む)の各期における看護について講義した。各論として、開頭術と子宮・乳房切除術に伴う特徴的な看護について講義した。呼吸器合併症予防と創傷管理、点滴やドレーン挿入中の患者の寝衣交換と術後離床時の援助について演習を行った。

教員自身の授業評価

術後は呼吸器合併症が生じやすい状況であるため、その予防については術前から術後にかけて意識的に取り組む必要がある。その呼吸器合併症予防のための演習を今年度は2コマに増やしたことで、講義で学習した内容と事前学習を踏まえて理解が深まったと考える。授業での学びは後期の成人臨床看護IVでの事例に取り組むうえで活用される基本的な知識であり、ひいては実習でも活用できることを目指している。授業アンケートの結果から、「周手術期に関する基本的な知識が得られた」と評価する学生が多かったことから学習の意図は伝わったのではないかと考える。

学生アンケートの評価項目のなかで、「学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めていた」に関して低い評価をしている学生が多かった。学生の反応から、手術侵襲における生体反応のメカニズムを理解することが難しいことが伺えた。

また、開頭術と子宮・乳房切除術に伴う特徴的な看護について、講義時間が短く一方的な講義となってしまったことが影響していると考えられる。

これからの授業に対する目標

テキストや関連図を活用しながら、手術侵襲によって患者が示す反応・症状がなぜ引き起こされるのかを理解を促していく。

今後の成人臨床看護IVでの事例や臨床の場で活用できることを目指し、周手術期に関する基本的な知識・技術が習得できるための授業を行っていく。

学生への要望

手術侵襲によって身体は様々な反応が引き起こされます。なぜそのような反応が引き起こされるのか、そのメカニズムを学習します。神経・内分泌における反応について理解できるまで復習してください。

手術前の看護・手術中の看護・手術後の看護のビデオを視聴することで、周手術期の患者の経過と援助

についてのイメージがつかめますので事前学習に活用してください。

演習では1年生で学習した技術を踏まえた内容となっています。学習した内容については必ず復習し活用できるよう準備して臨みましょう。

科目名	成人臨床看護Ⅱ	科目責任者名	萱嶋 美子	対象・開講時期	2年生・前期
実施状況					
<p>この科目は、運動機能障害をもつ成人の看護、がん患者の看護、脳・神経障害をもつ成人の看護、の3つの単元で構成されている。最初は骨折という身近な単元から入り、その後、脳・脊髄から末梢神経が関わる、学生には理解が難しくなる内容を、わかりやすく伝えるよう工夫を重ねている。</p> <p>運動器では、骨折時の看護として講義と牽引療法の演習を実施した後、脊髄損傷の看護を簡単な事例を取り上げて講義している。がん看護では、概論で、がん患者の身体的・心理・社会的・スピリチュアルな側面と、がんサバイバーという視点からの患者理解と看護の役割について講義している。その後、がん看護の認定看護師4名により、化学療法、放射線療法、疼痛マネジメント、緩和ケアについて講義をし、まとめの講義では、聴く技術の体験や死生観について各自が語ることを行っている。</p> <p>脳・神経系では、脳卒中についての基本的な知識を踏まえた上で、脳梗塞をきたした患者の看護について事例を用いて講義を行い、事例の状況を踏まえて片麻痺のある患者への看護演習を行っている。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>授業評価の項目別回答結果は、全項目で全体平均を上回っていた。その中で、授業の総合的評価として、「Q18 この授業はわかりやすい授業だった (4.21)」（全体平均 4.16）、「Q20 この授業で学問的興味をかきたてられた (4.24)」（全体平均 4.12）、「Q21 この授業を受けて満足した (4.28)」（全体平均 4.17）という結果であった。学生の意見にも「難しい内容だったがわかりやすい授業だったので理解できた」とあり、学生が難しい内容を理解することにより学問的興味・関心を抱けるようになってほしいという、授業で目指している教員の思いが通じていると評価した。</p> <p>また、講義や演習の中で、一人ひとりの患者に対して、大切な存在として丁寧に誠実に関わることが大事だと伝えていたが、自由記述に「その人を大切にする看護がどれだけ大切かわかった。そんな看護師になりたい」と数名が書いていた。教員が大事にしてほしいと思っている看護の基本姿勢が学生に伝わっていることを確認できた。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>講義では、病態を説明する図や写真を入れて工夫しているが、難しい内容が続くこともあり眠気を催す学生がいる。今後、講義中に30分毎に小休止を兼ねて近くの人と自由にディスカッションする時間をとり、内容の理解度がさらに上がるようにしていきたい。</p>					
学生への要望					
<p>自由記述に「もっとポイントを教えてほしい」という意見があり、大事なことをしっかり強調していきたいと思います。ただ、ポイントだけわかっても、なぜそれが大事なかが理解できないと知識としては不足です。専門職として確実な知識と、知識に裏付けされた技術・態度を身につけてほしいので、思考過程を丁寧にたどっていく学習を大切にしていって下さい。</p>					

科目名	成人臨床看護Ⅲ	科目責任者名	坂本 優子	対象・開講時期	2年生・後期
実施状況					
<p>慢性疾患をもつ患者を支える看護を学ぶ学生が“考える授業”をテーマに課題に取り組めるように授業デザインをした。ベースとなる基礎知識が定着していない学生のレディネスをカバーできるような“知識の確認”時間を設けた。導入として基礎となる疾患の特徴や解剖生理についてリフレクションし、動機づけを行った。学生は慢性疾患をもつ患者の困難について理解を深め、演習では理論的な解決方法を学び楽しい授業であったと回答している。また、使用される薬剤について、より理解を深める目的でDVDを使用</p>					

したが、「眠くなる」という回答があった。午後の授業であるという要因が考えられる。
教員自身の授業評価
成人教育の理論を踏まえ、事前学習が必要であるが、課題の目的についてさらに十分に説明が必要だったと思われる。単に技術を習得することのみならず、エビデンスから確認していく目的の事前課題であるが、簡単に仕上げたい学生の思いと、教員との間で十分なコンセンサスが得られていない反省があった。より、新しい知見を学生に提供できたことは有効であった。
これからの授業に対する目標
学生の反応を見ながら、授業を展開し考えながら思考を展開させていくことが、より実践能力を育む手がかりとなる。
学生への要望
成人教育の理論を念頭に急性期から回復期、慢性期と繋がっていることをイメージしていただきたい。実習で急性期から、回復期へと向かい、セルフマネジメントや自己効力感を持ちながら慢性疾患をセルフモニタリング自身の力を信じ、患者自ら自己決定できるよう援助していく看護の大切さを実感していただきたい。

科目名	成人臨床看護Ⅳ	科目責任者名	阿部 ケエ子	対象・開講時期	2年生・後期
実施状況					
周手術期各期の患者の特徴とアセスメントの視点・看護を学ぶため、1つ1つ既習の知識を想起できるよう授業資料を持参してもらい、既習の内容を確認しながら授業を進めた。					
思考過程を学習する事例演習では、2回の記録物提出を求めた後、詳細なコメントをつけて学生に返却した。また、よくできていた部分・不足しやすい部分・誤解しやすい部分については、全員にフィードバックし、解説を行い、アセスメントの視点・看護を深められるようにした。					
技術演習では、術後の患者のイメージがつきやすいよう、創部やドレーンの挿入などをよりリアルに再現して工夫した。また、小グループ制とし、教員のフィードバックを身近に受けられるようにした。					
教員自身の授業評価					
すべての項目について、高得点であった。しかし、「主体的な学習を通して学習方法を身につけたり、探求する姿勢を身につけたりする」という目標の達成が低いと考える。					
これからの授業に対する目標					
学生の主体的な学習を支援できるように、課題の内容や方法を検討する必要がある。思考過程の学習は、非常に難易度が高いため、昨年同様に学生へのフィードバックを多くし、アセスメントの視点・看護を深められるようにしたい。					
学生への要望					
この科目は、予習・復習を必須とします。学習方法については、授業を通して助言していきたいと思えます。学習方法を身につけるとともに継続する力も身につけてほしいです。					

科目名	老年臨床看護Ⅰ	科目責任者名	飯室 淳子	対象・開講時期	2年生・通年
実施状況					
老年臨床看護Ⅰでは、高齢者に特徴的な症候・疾患・障害について理解し、健康を支えるうえでの看護の技法や様々な状態・状況に応じた看護について学習して欲しいと考えている。解剖生理学や病態学での既習知識をベースに、看護の技法や様々な状態・状況に応じた看護についての部分に最も時間を使い丁寧に教授して行きたいと考えている。しかし、加齢変化といえども多岐にわたる部分であり、学生の理解に合わせた授業構築においては、各単元の既習知識整理部分も授業内容に組み込みながら進めている。					
教員自身の授業評価					
授業評価アンケートの項目別回答の平均値は、全項目において全体平均より高い結果であった。最も平					

<p>均得点が高かったのは「Q11 教員の説明は理解しやすかった 4.63」「Q17 教員のこの授業に対する熱意が感じられた 4.63」であった。自由記載でも「わかりやすい説明」「ペースも良い」など授業進行は学生の理解に即したペースであったと考えられる。</p> <p>しかし、回答分布では殆どの項目で「大いにそう思う」「そう思う」との回答が 90%を上回っていたが、80%台の項目が 3 項目（「Q7 自分で調べ考える姿勢がもてた」「Q9 この授業においてシラバスは役にたった」「Q8 この授業の学習の到達目標は達成できた」）みられた。Q2 の授業に関連した学習時間の回答から本教科関連学習は、65%の学生が週に 1 時間未満ということからも、学習の動機付け・継続には繋がっていないとわかる。現在、提出を求める課題は、演習後記録のみであることから、日々の授業に向けての事前学習が行えるような働きかけ・工夫が必要と考える。</p>
<p>これからの授業に対する目標</p> <p>毎時間、自作の配付資料を作成し、それに沿って授業を進行している。配付資料については、自由回答内容からも肯定的なコメントが多数あるため、継続方向とするが、既習知識の事前確認学習意図を目的に、「加齢変化等の部分を自記式とする」資料に変更し、授業当日配付ではなく「事前配付」し予習して授業に臨むための工夫を取り入れた方法へ変更する。</p>
<p>学生への要望</p> <p>老年臨床看護Ⅰでは、高齢者に特徴的な症候・疾患・障害について理解し、健康を支えるうえでの看護の技法や様々な状態・状況に応じた看護について学習して欲しいと考えています。1 年次での既習知識（解剖生理学、加齢における身体的・心理的・社会的変化、等）や 2 年次で併行して学習している他科目の学習内容も含め、事前学習をして授業に臨んで戴きたいです。</p> <p>また、高齢者に特徴的な症候・疾患・障害については多岐にわたります。通年科目とはいえ、授業内容で全て網羅することは難しいため、授業での関心を自己学習に繋げて戴きたいです。</p>

科目名	老年臨床看護Ⅱ	科目責任者名	春田 典子	対象・開講時期	2 年生・後期
実施状況					
<p>「高齢者の看護過程についての学び」は、これまでの老年看護学の既習内容や、老年臨床看護Ⅱの学習内容も関連付けながら、模擬事例を用いて、情報の収集・アセスメント・診断・計画立案の看護過程を教授した。個別のワーク指導や老年看護学担当教員によるグループ演習指導で学びをサポートした。</p> <p>さらに、高齢者のヘルスプロモーション、介護保険制度、受療形態に応じた看護、ICF を基盤にした高齢者の看護、リハビリテーションと高齢者看護、高齢者の保健医療福祉の関連施設の看護、介護家族の看護については、それぞれ高齢者の看護過程等と関連付け、臨床的な内容を取り入れながらパワーポイントや資料で関心を持たせるように工夫した。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>看護過程の指導については、教員の実習との兼ね合いもあって、中間と最終提出で看護過程の提出物の指導を行った。特に重要な中間提出では一週間で全員の提出物を細かく見ながら対面で指導をすることが難しく、提出物にコメントを残すのみとなった。後日、授業の中で指導内容に触れるなどしたが、リクレーションペーパーに「疑問が残った」と書いた学生もあった。積極的な一部の学生は、頻りに教員と連絡を取って看護過程の質問と学習を繰り返していたが、それらの学生は、比較的満足度が高い様であった。</p> <p>講義については、高齢者看護のアセスメントの奥深さや面白さを伝えたいと、資料を多く作成した。しかし、授業アンケートの自由記載意見では、「授業資料が見つらい。内容がごちゃごちゃしている。…見返しづらい。」等の意見があり、限られた期間内で興味を引き出せるように内容と量を精選する必要があった。特に、後から復習する時に、整理しやすく解り易い資料の整理や講義の工夫が必要であった。</p> <p>さらに、後半の講義部分では盛りだくさんに作成したパワーポイントの内容を足早に読み上げる様な説明になってしまい、時間内に理解できる分量を超えてしまっただけでなく、広がりすぎて既習内容とのつながりが解りにくくなった。そのため、授業アンケートの「Q18 この授業はわかり易い授業だった」の評</p>					

<p>価が平均より 0.06 ポイント低い結果となった。特に、リフレクションペーパーに「今までの既習科目でも習った」等の意見もあり、既習内容から発展した重要な内容を厳選し、イメージしやすい事例を多く用い、解り易く解説する工夫が必要であった。その他、全体的な授業アンケート結果では、平均値若しくは平均値以上の回答が得られた。</p> <p>今回特にこだわった介護保険や社会資源の講義では、実物の書類を使用したり、身近な施設や地域の具体例を挙げたが、リフレクションペーパーでは、これらを学習する意義の理解が乏しい様だった。</p>
<p>これからの授業に対する目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護過程の指導は、集団指導だけでなく、オフィスアワー等で個別指導の時間を意図的に設ける。 2. 講義回数に応じて適量の資料を工夫し、ポートフォリオ形式で整理でき、復習時活用できるようにする。 3. 既習内容から繋がりやすい重要で発展した講義内容を厳選し、イメージしやすく事例を用い、解説する。 4. 参加型授業として、ロールプレイングや実験等いろいろな手法を用いて学生に興味を持たせ、学生自身の学習意欲を高める。 5. 高齢者の医療や介護に関わる課題を考え、急性期医療においても介護保険や社会資源の知識が重要であることを意識させ、学習意義の理解に繋げる。
<p>学生への要望</p> <p>積極的に授業に参加して欲しい。</p>

科目名	小児臨床看護 I	科目責任者名	木村 節子	対象・開講時期	2年生・通年
実施状況					
<p>この科目では、小児看護学概論で学習した成長発達の段階をふまえて、小児期の主な疾患や症状、検査や治療などのさまざまな状況にある子どもと家族の看護について学習する。</p> <p>子どもにとって病状や治療は苦痛であるだけでなく、成長発達の継続に大きく影響するため、苦痛をできるだけ取り除き、子どもらしく療養できるような援助技術について講義と演習を行った。演習では小児看護の視点で遊びの援助技術と、検査や処置を受ける子どもへの看護技術について、事前学習の促しと実施後の振り返りを行った。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>授業アンケート結果の項目別回答で点数の高かったものは「Q17 教員の熱意 4.48」「Q5 新しい考え方、発想がもてた 4.46」「Q6 基本的な専門知識が得られた 4.43」「Q15 教員の話し方、声の大きさ 4.43」であり、科目の学習の到達目標 1～3は達成できたと考えられる。</p> <p>全体平均よりも低い項目はなかったが、最も点数の低い「Q9 シラバスの活用 4.09」については、次年度はシラバスの内容を見直して予習復習に役立てられるように提示する必要がある。また自由記載からは、実際に多くのおもちゃに触れることで学生自身の興味や意欲を高められたという意見があり、到達目標 4についても達成できたと考えられる。</p> <p><学習目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 健康を障害された子どもと家族を理解する。 2. 小児期の主な疾患や症状を理解する 3. 療養中の子どもの治療過程と成長発達に応じた看護を理解する。 4. 小児看護の視点で遊びの援助技術の方法を身につける。 					
これからの授業に対する目標					
<p>遊びの援助技術の方法を身につけるために必要な自己学習や振り返りの時間を持てるようにしていく。また、教材、シラバスの活用、学生自身が自分で調べる姿勢が持てるように、授業の内容や方法を検討していく。</p>					

学生への要望
小児看護学概論で学習した小児各期の発達について復習をすること。また、授業後には教科書を活用して復習をして、その日の学習内容について自分の言葉で説明できるようにしましょう。

科目名	小児臨床看護Ⅱ	科目責任者名	湊田 明子	対象・開講時期	2年生・後期
-----	---------	--------	-------	---------	--------

実施状況
この授業では、子どもの健康レベルと成長発達に応じた看護が理解できるよう急性期・慢性期および終末期の看護を中心に授業展開している。さらに、今までの小児看護学概論、小児臨床看護Ⅰでの学びを統合させ、事例を用いて小児の看護過程の演習を行っている。
授業展開の中では、健康を障がいされた小児の状況が具体的にイメージできるよう理解できるよう動画を活用した授業構成を行っている。
看護過程の演習では個人でのワークに個別に質問できるようにし、最後にグループワークを行い共有出来るように行っている。最後の授業でまとめを行い、授業で学んできたことを振り返れるようにしている。

教員自身の授業評価
学生は事例など具体的な看護については意欲的に授業に臨む様子が見られた。また、動画や本などの活用は興味を持ちやすい状況になったと考える。
しかし、看護過程については個人ワークの際に気軽に質問できない学生もいると考える為、個人ワークとグループワークの配分について検討の余地があると考えます。
学習の到達目標については全体的には低くないが、全体的に各項目の段階1につけている学生もいるため、各授業項目での内容の理解度も確認できるようにしていく必要がある。

これからの授業に対する目標
各健康の段階別への看護を考え、子どもや家族の辛さにも目が向けられるよう具体的に伝える工夫をさらに行っていく。終末期の子どもと家族の看護については課題に対してレポート提出しており、とてもよい内容が書けているので共有できる場が作れるようにしていく。
また、この授業を最後に小児実習に臨むこととなるため、今まで学んだ知識や看護過程の考え方を活かせる工夫をしていく。

学生への要望
この授業が終了すると次の学習は小児看護学実習となります。小児看護学概論、小児臨床看護Ⅰが全て繋がっていることを意識し、既習の学習を踏まえて授業に臨むことを希望します。看護過程の演習では授業時間中に質問できる時間を確保していますので積極的に質問してください。

科目名	性・生殖と看護	科目責任者名	望月 好子	対象・開講時期	2年生・前期
-----	---------	--------	-------	---------	--------

実施状況
本科目においては、従来の母性看護学概論の枠を超え、女性および男性の心身の特徴をふまえ、人間にとって健やかな「性と生殖（セクシャリティ）」について、リプロダクティブ・ヘルス/ライツ、母（父）と子との関係性や家族形成期における母性の健康問題とそれを取りまく社会資源や法規・行政・保健統計などについての理解を深めることを通して、多くの視点から母性の対象が捉えられることを目指した。特に我が国の母性保健行政や施策、母性保健統計などの理解とともに、世界における女性の健康問題等にも目を向け、よりグローバルな視点で考えられることも目標としている。
また、リプロダクティブ・ヘルス/ライツに関しての内容は、倫理的な価値観も問われる内容であり、また今後の学生自身の生き方にも関係するものでもあるため、十分理解し思考が深まるようにしている。課題の一つとして2か月間のBBT（基礎体温）測定に取り組みせ、自身の健康に向き合う体験もさせている。男子学生にも同様に、毎日の体温測定を課し、自分の健康のアセスメントと対象理解につなげられるようにしている。授業アンケートにおける全体評価のポイントは4.55であった。

<p>教員自身の授業評価</p> <p>項目別回答では、すべての項目が全体平均より高かったが、「Q7 自分で考える姿勢がもてた 4.17」「Q9 この授業においてシラバスは役にたった 4.14」と数字的には低い結果であったため、今後改善が必要であると考えます。「Q17 教員の熱意 4.71」「Q15 教員の話し方 4.69」は、特によい評価を得たので、引き続き熱意をもって、わかりやすい話の仕方等に配慮していきたい。</p> <p>自由記載では「学生のペースにあわせている」「話がわかりやすく楽しかった」「説明がおもしろかった」「男子を前に座らせているのが良い」などのコメントがあった。「面白い」という意味は多様な意味を持つと思われるが、「Q20 この授業で学問的興味をかきたてられた 4.51」であったことから、学習内容に関する興味関心を深めることができたと考えます。</p> <p>改善点に関しては、「男子を後ろにすべき」と資料について「どこが重要かわからなかった、赤字が多かった」「できるだけ穴埋めにしてほしい」という3つのコメントがあったため、意見を参考に資料作成していきたい。</p>
<p>これからの授業に対する目標</p> <p>前述したように、「自分で考える姿勢がもてた」「この授業においてシラバスは役にたった」の項目が低い結果であったため、今後工夫していきたいと考えます。また、男子学生の前列着席については、初回授業の際に、その意図を説明しており（母性看護学実習は男子学生も女子学生と同様にすべての実習を行う。これにあたり、特に自分のこととして理解しにくい男子学生は前に着席し、積極的に学んで欲しいという説明）理解が得られていると考えため今後も継続していきたい。</p> <p>自己学習時間に関しては、授業時間以外の学習時間は、1時間未満39名、0時間18名という結果であったため、自主的に授業外にも学べるような課題の提示等が必要であると考えます。</p> <p>また、シラバスについては、学生が内容をイメージしやすいように内容表現を工夫するほか、参考文献資料（本学図書館に所蔵されている書籍のうち、本科目に関連する全書籍についてエクセルデータにまとめたものを印刷・配布している）の活用方法についても再検討していきたい。</p>
<p>学生への要望</p> <p>本授業の内容は、看護師としての知識のみならず、学生自身の一人の女性（男性）としてヘルスプロモーションに関わるものなので、他人事ではなく自分のこととして意欲的に学んで欲しい。また、産み育てることに対する社会の動向にも関心を深めて欲しい。</p>

科目名	母性臨床看護Ⅰ	科目責任者名	小川 景子	対象・開講時期	2年生・通年
実施状況					
<p>妊娠・分娩・産褥期にある対象の身体的・精神的・社会的特徴を理解し、健康的な生活が送れるよう援助する為の基礎的知識を習得することをめざし講義した。</p> <p>講義では、映像や模型を活用しイメージ化をはかった。講義終了時、レスポンスシートに重要と思うことを記載することで振り返りの機会とした。またレスポンスシートでの質問に対して、個別または全体へコメントや補足説明を行った。</p> <p>科目に関連する社会・文化的事項に関心を持つことをねらい、①産育慣習、②周産期医療に関する現状と課題をレポートテーマとした。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>本講義のアンケート結果は、いずれの項目も平均4.3以上を示している。その中で、「Q18 わかりやすい授業だった」が4.47、「Q21 授業を受けて満足した」が4.48である。本講義は、学生にとってイメージしにくい内容のため映像や模型などの教材を多用したことが、この結果に関係しているものと推察される。</p> <p>「Q14 質問や相談ができるよう配慮されていた」は、4.46である。授業中の質問はほとんどなかったが、レスポンスシートに質問を記載する学生は複数見られた。内容により個別（レスポンスシートへの返答）または全体にコメントしたことが、アンケート結果に影響していると思われる。</p>					

これからの授業に対する目標
次年度からは、講義の中で DVD を視聴する際に見る視点を提示して、ワークシートに記入しながら見る方法とする。視聴後、数人の学生からメモした内容を発表してもらいまとめを行うことで、学生がより能動的に講義へ参加できるかたちとする。
学生への要望
本講義で学ぶ内容は、基本的用語や基準値をおさえることで理解しやすくなります。新しく学んだ専門知識の理解のために、自己学習は復習に重点を置き進めていくことを勧めます。こうした学習を積み重ねることで、後期に開講される母性臨床看護Ⅱ、3年次に開講される母性看護学実習へと学びをつなげてください。

科目名	母性臨床看護Ⅱ	科目責任者名	望月 好子	対象・開講時期	2年生・後期
実施状況					
<p>本科目においては、周産期にある対象への看護の理解を深め、母性看護学実習の中で活用できるようにするために、周産期における援助に必要な知識と技術の習得を目指した。特に、新生児の生理的な特徴とその看護を理解し、周産期看護に特有な援助技術について演習を通してその実際を学習させた。また、事例による看護展開および保健指導案等の立案・実施を通して、ウェルネスを取り入れた看護過程展開および母性の対象の特性についての理解を深め、実習につなげられるようにした。</p> <p>今年度より、演習時（看護過程展開、保健指導発表を除く）に非常勤教員が加わり、学生への指導を強化できた。具体的な演習項目としては、沐浴・妊婦体験・妊婦の診察・新生児の計測・妊婦体操・産褥体操・分娩時の援助・骨盤計測・保健指導実施などであった。看護過程に関しては、母性看護学実習で出会う対象を想定した事例を提示し、ウェルネス型の思考も取り入れた看護過程について事例展開を個別に実施させた。実習では受け持ち期間も短いため、学内での看護過程展開演習は必須である。また、母性看護に特有な看護技術（特に沐浴等）は、臨床で体験できる機会を持ってなくなっているため、今後も学内演習で技術の習得を目指す必要がある。</p> <p>授業アンケートにおける全体評価のポイントは 4.70 であった。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>項目別回答では、すべての項目が全体平均より高かった。「Q6 基本的な専門知識が得られた 4.73」「Q16 私語への対処 4.73」「Q17 教員の熱意 4.73」は、特によい評価を得たので、引き続き同様の取組みをしていきたい。</p> <p>自由記載では「話がわかりやすく楽しかった」「映像や事例をもとにした授業が現実的な感じがしてよい」「自分のためになる授業がたくさんあった」などのコメントがあった。改善点に関する意見はなかった。</p> <p>本科目は、後半がほとんど演習であるため、学生参加型の授業になっていると思われる。母性看護学実習で出会う対象を想定した看護過程展開については、ウェルネス型の看護過程の考え方を説明しているが、特に大きな混乱をきたすことなく、他の科目で培った問題解決思考を基盤に母性看護対象にむけた看護過程の理解もできていると考える。また、授業の最後には、次年度の臨床実習に向けての事前学習課題（2つ）を提示し、春休み期間に取り組むように設定しているため、授業科目と実習が連動していることが学生にも理解されやすいと考える。</p>					
これからの授業に対する目標					
自己学習時間に関しては、授業時間以外の学習時間は、3時間以上10名、2時間～3時間未満8名、1時間～2時間未満8名、1時間未満31名、0時間18名という結果であったが、看護過程展開や保健指導実施のための教材づくりなどを自己学習課題としているため、もう少し授業学習時間はあると考えられる。今後も、臨床実習をイメージでき、具体的に対象理解やケアに活かせる内容を心がけていきたい。					
学生への要望					
本科目の内容は、母性看護学実習に直接必要な知識・技術である。例年、演習そのものに対する関心は					

高く、意欲的に演習している学生が多い。
 今後も授業内容そのもののみならず、次年度の臨床実習に向けての事前学習課題（2つ）にも意欲的に取り組み、実習につなげてほしい。

科目名	精神臨床看護Ⅰ	科目責任者名	大貫 美奈子	対象・開講時期	2年生・前期
実施状況					
<p>精神看護学概論で学習した基礎的知識を活用しながら、復習を含め、精神の健康の維持・回復を支援するための基本的な考え方、看護現象のとらえ方、援助方法を更に専門的な看護の視点で教授した。</p> <p>具体的には、対象が体験している世界を想像しつつ、目の前の現象とその背景を知り、対象の立場からその意味を考え、対象像を描き、看護の方向性を定めていくためにはどのようなものの見方・考え方をしていけばよいのかを事例展開をもとに学習し、精神看護学における看護の理解を深めた。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>授業後半の突然の授業担当者の変更に伴い、学生に不安を与えた部分もあったと考えるが、授業としては、精神疾患をもつ人に対する看護について各症状から考える看護、治療と他職種連携、事例をもとに看護過程とその展開方法の教授を行い、学生の授業評価アンケート結果からも概ねわかりやすかったという評価を得られている。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>精神看護学における疾病は、精神＝こころという目に見えないこともあり、学生からわかりにくい、理解できないという声が多く聞かれる。精神疾患を特殊なものと考えず、自分自身の立場に置き換えて考えられるように身近な出来事や社会環境を交え、学生にとって理解しやすい教授方法の工夫を行い、実践していくことを目標とする。</p>					
学生への要望					
<p>予習および復習を積極的に行ってほしい。</p>					

科目名	精神臨床看護Ⅱ	科目責任者名	大貫 美奈子	対象・開講時期	2年生・後期
実施状況					
<p>精神看護学概論および精神臨床看護Ⅰで学習した知識を活用しながら、精神障害や種々の精神的不健康をもち、多くの問題を抱えながら生活をしている人々を全人的にとらえ、社会の中でその人らしく生活できるような環境や支援、関わりについて学習をした。</p> <p>また、精神看護の歴史的背景や法制度、対象が社会生活を営むために必要な社会資源の種類や利用方法を含め、幅広い精神看護の支援およびケアの実際を学習した。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>授業としては、対象を全人的にとらえ、身体的・心理的・社会的な側面から必要な看護を考え、精神看護の歴史的背景を含め、対象が抱える「生きにくさ」や「その人らしさ」とはどのようなものかを理解できるように実際に教員が体験した看護場面や実習場面を授業に取り入れ、学生が想起しやすいように教授方法を工夫して行った。</p> <p>学生の授業評価アンケート結果からも教員の実体験や実習場面をもとに話してくれてわかりやすかったという評価を得られている。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>精神看護学実習に向けての最後の機会となるため、今までの精神看護学領域での学習が統合され、知識や技術が充実する内容となるように授業構成の工夫を継続して行っていくことを目標とする。</p>					
学生への要望					
<p>精神看護学概論、精神臨床看護Ⅰ、精神臨床看護Ⅱの授業内容を統合して理解し、精神看護学実習へ積極的に臨むためにも復習をしっかり行ってほしい。</p>					

科目名	在宅看護概論	科目責任者名	中田 芳子	対象・開講時期	2年生・前期
実施状況					
<p>在宅看護概論は、看護学生にとってイメージしにくい教育内容のため映像を取り入れたり、事例を提示しながら授業を組み立てている。また、3回目には手浴と足浴をペットボトルと紙おむつを使用して行う演習を入れている。これは、在宅での物品の工夫や経済性を考えた看護を実際に体験することによって、以降の学習の動機づけを意図している。グループワークでは、1年次での講義や実習を想起しながら施設での看護と在宅の看護の違いを話し合い、発表する機会を設け参加型の学習形態も取り入れている。また、介護保険などの制度の学習が必要なため、小テストを授業内で2回実施し、定期テストにつなげている。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>項目別回答では、「Q7 自分で調べ考える姿勢 3.88」と平均より低く、「Q9 シラバスは役にたった」も 3.86 であった。在宅看護はイメージしにくいという教員の思いから課題は提示していなかった。また、外来講師の関係で授業進度の予定も変更した経緯があり、シラバスは活用しにくかったと考える。「Q17 教員の熱意 4.74」「Q15 教員の話し方 4.69」と全体平均より高かった。在宅看護に関しては、教員自身の介護体験も含めて授業を進めてきたことが学生に伝わり、今後の学習の動機づけになったのではないかと考える。</p> <p>自由記載では「DVD や体験談が良かった」「小テストが復習になった」等の意見があり、教員が意図したことが学生にも伝わっていると考える。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>授業の組み立てや DVD の活用は今後も積極的に取り入れ、学生が在宅看護について関心が持てるよう一層工夫していきたい。授業前後の予習復習は具体的に指示しないで、学生に任せていたが、今後は事前課題や事後課題を提示して「自分で考える姿勢が持てる」方向にしていきたいと考える。そして、今回の結果では、授業時間以外の学習時間は、1時間未満 33 名、0 時間 14 名という結果であったが、自己学習時間も増えるような教員側の課題提示を工夫していきたい。</p> <p>シラバスについては、学生の指針となるような内容にし、時々到達目標を確認する等シラバスを活用しながら授業を進め方法も取り入れていきたい。</p>					
学生への要望					
<p>在宅看護がイメージできるよう DVD や事例を取り上げることが多い科目なので、事前学習を行うことにより、その内容が一層理解しやすくなります。また、小テストが途中でありますので、1コマ1コマの授業で学習内容がみにつくよう復習も必ず行ってください。この科目は、看護の視野が広がり、関心が高まると自ずと学習意欲も高まります。</p>					

科目名	在宅看護論 I	科目責任者名	新村 直子	対象・開講時期	2年生・通年
実施状況					
<p>在宅に生活する人々の日常生活援助の場は、療養者のみならず家族の生活の場であるため、家族に向けたあるいは家族を中心に捉えた援助の学習も重要となる。よって、在宅において看護師が行う療養者へのケアとともに、家族員に対する援助、さらに家族員が自分の家族である療養者へケアを行う場面を支援することについても学生が意識を持てるように演習を組んでいる。</p> <p>家族（療養者を含む）の生活場面では福祉用具を使用しているなど、学生はイメージがつきにくいので、映像を多く用いている。日常生活の援助の演習は、メンバーを固定したグループごとに行っている。ここでは看護師役・療養者・家族役を決めて、それぞれの視点で気が付いたこと、疑問点・改善点などを積極的に発言し学習している。このように常に同じメンバーでグループダイナミクスを活性化させ、意図的に学習することを促している。その他、家族は家族構成や経済性などに応じ様々な工夫をしているが、学生にも身近なものを使用した作品の提出を求めている。これにより学生に創意工夫する視点とともにその楽しさを伝えている。在宅看護の看護過程は、グループごとに家族（療養者を含む）への看護計画を立案している。また看護計画の実施の一部として家族への指導場面も体験させている。家族を含めたケアの実</p>					

<p>施場面のロールプレイにより、ケア場面を様々な視点で捉え、家庭でケアを行うことへの視野を広げている。</p>
<p>教員自身の授業評価</p> <p>在宅における療養者と家族の生活、社会資源の活用、多職種の連携などは DVD 教材や YouTube の映像を多く使用した。授業アンケートにおいても、「Q10 授業内容が明確だった 4.37」「Q12 教材は適切だった 4.43」と平均より高く、学生の理解に効果的であった。</p> <p>また、創意工夫作品作成の告知を授業初日の時点で行うことで、学生は日ごろから、その視点を持ち演習に臨めた。それにより「Q5 自分によって、新しい考え方、発想がもてた 4.37」と高い評価であったと思われる。学生へ作品について質問することで、さらなる発想の発展を目指していきたい。このように、学生の考えながらケアを行う姿勢を養いたい。その他、「Q15 教員の話し方、声の大きさ」はよくないとの回答があったため、その点に注意し改善したい。</p>
<p>これからの授業に対する目標</p> <p>学生は、在宅における看護のイメージはつきにくいいため、今後も適切な映像を選択し、使用していく。技術演習に関しては基礎看護学で学習した内容をもとに、より深く考えていくことで「Q5 自分によって、新しい考え方、発想がもてた 4.37」という感覚を得て、看護の面白さが実感できるのだと考える。よって、タイミングをとらえて質問を投げかけるなど、学生の発想を活性化させ学生の自主性を促すかわりをしていきたい。</p> <p>このように、学生の考えながらケアを行う姿勢を養いたい。その他、「Q15 教員の話し方、声の大きさ」はよくないとの回答があったため、学生の反応を確認することを意識してすすめたい。その他、「学生が学習した時間」に関しては、1 時間未満が 16 名と多いため、自己学習を促すよう課題提示を工夫していきたい。</p>
<p>学生への要望</p> <p>この授業では在宅に療養する人々の支援を学習するが、基礎看護学で学習した内容がベースとなっている。在宅看護は療養者や家族がその主体となるため知識の応用が必要である。よって、演習前に既習の知識を確認することで、より効果的な演習になります。演習では感じる力や想像力を発揮し、ディスカッションすることで、楽しく効果的な学びの場を創ってほしい。</p>

科目名	在宅看護論Ⅱ	科目責任者名	中田 芳子	対象・開講時期	2 年生・後期
実施状況					
<p>在宅看護論Ⅱは、医療処置を受ける療養者や家族に対する看護について主に学修する。特に、在宅でのターミナルケアは訪問看護師としての重要な役割になっているので、看護の現状や療養者や家族の思うに沿った看護について学ぶ。他に、3 年次の在宅看護実習を見据えて、訪問看護ステーション、外来看護部門、継続看護の拠点である入退院センターの看護師の方々に看護の実践を講義していただく。</p> <p>また、3 年生の在宅看護実習では家庭訪問することになるが、学生にとって他人の家庭を訪問することは非常に緊張感が伴う。そこで、訪問看護に必要なマナーとコミュニケーションを学ぶためにロールプレイを行いながら、実践に即した形での学習を取り入れている。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>項目別回答は、全体に平均より高ポイントであり「Q9 シラバスは役にたった」は 4.49 であった。「Q19 授業全体の目標が明確であった」4.63、「Q20 この授業で学問的興味がかきたてられた」4.68、「Q21 この授業を受けて満足した」4.69 であった。在宅で医療処置を受けながら看護するというのは、内容的には難しく、映像で理解を深めたいと考え DVD を多く活用した。「Q12 教材は適切だった」も 4.56 であり、DVD を見ながら資料を穴埋めしていくという教材を作成し使用したことにより、意図的に見て、理解する助けになったのではないかと考える。</p> <p>自由記載では「外部講師の方々のお話はとても勉強になりました」「演習でのデモンストレーションがとても参考になりました」等があり、今後も引き続き外部講師の講義や演習も取り入れていきたい。</p>					

これからの授業に対する目標
<p>授業の組み立てや DVD の活用については、今後も今年度同様に進めていきたい。DVD は見るだけになってしまわないよう、資料も今後さらに工夫していきたい。</p> <p>授業時間以外の学習時間は、1 時間未満 33 名、0 時間 13 名という結果であったので、医療処置の基本は、成人看護学や老年看護学等で学んだ内容がほとんどなので、復習してから授業に臨むことができるよう自己学修課題の提示を工夫していく。</p>
学生への要望
<p>在宅看護論Ⅱは医療的な処置の看護について学ぶため DVD を視聴する機会が多い科目です。成人看護学、老年看護学、基礎看護学等の学修内容を復習して、授業に臨むことにより、関心も高まり理解しやすいと思います。積極的に復習や予習することを期待しています。そして、在宅でも看護師や多職種の支援を受けながら多くの人々が療養が可能であることを学んでほしいと思います。</p>

科目名	看護と医療安全	科目責任者名	千葉 美果	対象・開講時期	2 年生・後期
実施状況					
<p>この授業のテーマは2つある。1つ目は、ミスやエラーはどのようにして起きるのかといった、エラー発生のメカニズムから、人はなぜミスを犯すのかといったヒューマンエラーについて学び、自分たちの身の回りにある安全対策を考え、『安全』とは何かを考えること。2つ目は、付属病院で働く看護師を講師に招き、実際の医療現場でどのような対策がとられているのかを学ぶことである。</p> <p>『安全』は普通にあるものと考えがちであるが、その安全はどのように成り立っているのか、学生たちの身の回りにある安全対策を調べ、プレゼンテーションを行いことにより、『安全』とは何かを再確認し、安全に興味をもち事故防止的視点を持って行動できるよう意識づけを行っている。</p> <p>また、医療現場において看護師は、医療サービスの最終的な提供者になることが多く、危機に直面するリスクが高い。そのため、医療安全対策の動向及び、医療従事者としての基本的な倫理を踏まえて、医療事故発生の要因と予防方法について、現場で働く医療スタッフからの最新情報の提供も受けながら学習している。</p> <p>また、『危険予知力』を高められるよう KYT の演習を行い、結果を発表するといった学生参加型の授業形式も看護師協力のもと実施している。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>評価的には、すべて全体平均よりも高得点の評価をいただいている。しかし、「Q4 授業中私語なく、集中できた」、「Q8 この授業の学習の到達目標は達成できた」、「Q9 この授業においてシラバスは役にたった」は評価ポイントを 0.1 ポイント下回っているため、改善が必要と考える。</p> <p>私語に関しては、注意等を行いながら授業を進めているが、合同授業を講堂行うため集中力が切れるのも影響していると考え。「Q8 この授業の学習の到達目標は達成できた」、「Q9 この授業においてシラバスは役にたった」の、目標の明確化とシラバスの活用に関しては今後検討を行っていく。</p> <p>「Q11 教員の説明は理解しやすかった」、「Q14 質問や相談ができるよう配慮されていた」、「Q15 教員の話し方、声の大きさは聞き取りやすかった」、「Q18 この授業はわかりやすい授業だった」は、総合ポイント以上の評価であるため、学生にとって分かりやすく、自由に質問できるような授業の雰囲気を持続していけるよう努力していきたい。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>授業全体を通し、ゲームや錯覚や錯視の画像を見せるなどの工夫を行い、ただ受動的に教授を受けるのではなく、能動的な学習ができるよう工夫していることは今後も継続していく。</p> <p>また、プレゼンテーションの内容に対する学生の反応を見るためにクリッカー等を使用するなどのアクティブ・ラーニングを意識した授業方法を取っているが、一方的な反応であるためこの方法を進化させ双方向的なやり取りができるよう、学生たちに評価できる視点も養ってもらえるよう関わりたい。</p>					

この科目で学習することの多くは、臨床に出てから意識することの方が多く内容である。その点を十分強調しながら、集中して授業を受けてもらえるよう工夫を行ってきたい。

学生への要望

この授業で扱う範囲から出される国家試験の問題数は多くないが、その分、実習をはじめとした臨床の場や、普段の生活の中で活かすことができる内容が多く含まれる授業である。

日常生活を送る中でも、ほんの少し意識するだけで「なぜミスをするのか」「ミスの原因は何か」が見えてくると思う。この授業を通し、自分たちを取り巻く環境の『安全』を意識し生活できるようになってもらいたい。

科目名	家族看護学	科目責任者名	新村 直子	対象・開講時期	2年生・前期
-----	-------	--------	-------	---------	--------

実施状況

家族看護学は、学生がもつ「看護」のイメージとは違うため、そこを理解することが困難である。対象は、患者個人ではなく、「家族の一員に」「家族間の人間関係に」「家族の社会性」に焦点があたる。また、看護過程は、家族のセルフケア能力をアセスメントし、その向上を目指した看護を考え、介入は、情緒や認知に働きかけるコミュニケーションが中心となる。

このような性質から、興味を持って臨む学生もいる反面、興味が持てない学生もいる。授業では、親しみやすい映像を使用し、学生が主体的に考えられるよう、工夫している。一口に家族と言っても、家族の経験は学生それぞれにあることから、前半では、まず「2つの家族の物語」の映像を視聴し、各学生と教員の共通の視点を設定したうえで、共にディスカッションしながら課題に取り組んでいく。後半は「家族を看護する、とは」について、理論を踏まえ、事例を用いながら「家族をアセスメントすること」「家族の援助仮説を考える」ことを目指す。この全体のプロセスを通じ、「家族の捉え方」を理解することで、看護職の家族に対する基本的な姿勢について学ぶ。

教員自身の授業評価

初回の授業に続き2・3回目で演習を行っている。「家族に対する共通認識」を持つための映画は、幼少期の子を持つ2つの家族が同事件に巻き込まれていく物語であるが、学生にとってもなじみやすいストーリーなため、教材としては適切であった。しかし、この演習で養った知見を後半の事例展開でどのように活用するのかが、難しい学生がいた。事例の展開では、とにかくアセスメント用紙を埋めようとする学生がいたので、基本的な考え方を前半の事例を踏まえ丁寧に繰り返し説明し、学生の自分なりの考えを引き出す必要性を感じた。授業の学生の評価では「Q5 自分にとって新しい考え方、発想がもてた4.22」であるが、「Q11 教員の説明は理解しやすかった」、「Q15 教員の話し方、声の大きさは聞き取りやすかった」、「Q18 この授業はわかりやすい授業だった」など教員の説明の理解・話し方の聞き取り・わかりやすい授業だった、という点で低値であった。また、授業時間以外の学習時間に関しては、いくつかの宿題を課しているが、多くの学生が短時間の学習と回答していた。

これからの授業に対する目標

学生から「家族は看護を提供する上で重要な存在という知識は持っていたものの、それ以上考えることはなかった」という意見はよく聞かれる。このように、家族に気を配る必要性は感じるものの、「看護師が家族に働きかけることにより、家族に変化を起こす」ことのイメージは難しい。学生の発達課題に照らすと生活の経験は少ないため、アセスメント力は大きくないと思われるが、「家族の捉え方」「自分が家族をどのように看護したいと考えるか」を一人一人が考え、自分自身の意見を表明できることが重要と考える。このことから、重視すべき点は事例の展開ではハウツーを重視するのではなく、グループワークの人数を調整し、ひとりひとりの学生が自分の意見を表明し、課題に向き合えるよう、工夫する。さらに、教員の説明の内容・話し方などは、学生が理解できたか否か、反応を確認しながら、授業を進行する必要がある。その他、授業時間外の学習時間に関しては、どのようなことがこの時間に当たるのか、意識づけする必要がある。

学生への要望
<p>家族看護は、家族への気配りや親切だけではありません。家族に変化を促すことです。家族看護の実践は「これが正解」という答えはない。このような家族看護の面白さに触れてください。よって、先人たちが導いた理論や知識を学習した上で、ひとりひとりが自分で考え、自分の意見を表明してもらいたい。そして、目の前で起きている人間関係の現象を考察する力につなげてほしい。さらに、その蓄積が、人間観・看護観を養成に繋がることを意識し学習に臨んでほしい。</p>

科目名	看護研究の基礎	科目責任者名	手島 芳江	対象・開講時期	2年生・後期
-----	---------	--------	-------	---------	--------

実施状況

担当者は、看護研究の基礎的な項目を網羅できるように15回の授業を組み立てた。最終目標は、グループで研究計画書を立案することと設定した。1回目に看護研究の概要について講義し、その後、研究計画書を作成する過程に沿って講義を進めた。すなわち、研究課題の明確化について、文献検索について、これは3回分使用して演習を含めた。さらに、研究倫理について講義した。研究方法に関しては、量的研究方法と質的研究方法の両方を、演習を含めて講義した。科目の後半は、グループワークを通して研究計画書の立案に取り組んだ。グループワークの成果として、グループメンバー全員が、文献検索の結果と研究計画書の発表をおこなった。

教員自身の授業評価

全ての項目において全体平均を上回った。最もポイントが高かったのは、Q17「教員のこの授業に対する熱意が感じられた」の4.60であった。Q4「授業中私語なく、集中できた」が4.16と平均より上回ったことから、私語は一部の学生に限られていたといえる。

この授業で得られたことに関する質問であるQ5～Q8のポイントも高く、特に、Q7「自分で調べ考える姿勢が持てた」に関しては、2や1の評価をつける学生がいなかったことから、この授業の潜在的な目標である「研究的な視点を育成する」を達成できたのではないかと考える。

自由記載はなかった。

これからの授業に対する目標

学生が看護研究に興味をもち、今後の授業や実習の場において研究の視点を持つこと、さらに、卒業後もそれぞれの部署で看護の発展のために研究の視点を持ち続けることを期待したい。

そして、この研究的な視点は、授業内にとどまらず、他の授業や演習、また実習においてもおおいに役立つことを事例をあげながら伝えていきたい。

学生への要望

難しそうなイメージのある看護研究ですが、研究の過程をふみながら、取り組んでいてもらいたいと思います。グループの仲間でディスカッションすることの意義も実感して欲しいと思います。授業態度に関しては、教える者と学ぶ者は上下関係ではないと思っていますが、授業という場を共有する者同士として、礼儀があると思います。授業中に意見等がある場合は公式に発言して欲しいです。

科目名	生命と倫理	科目責任者名	望月 好子	対象・開講時期	2年生・後期
-----	-------	--------	-------	---------	--------

実施状況

本科目は選択必修科目であるため、2クラス合同授業である。今年度は、80名の学生が履修した。

本科目では、先端医療と生命倫理についての様々な問題の現状を知り、学生個々の人間観・死生観・倫理観を深めていくことを目指している。講義・映像視聴・グループディスカッションを基本構成として実施し、感想カードやレポートを通して、学生個々の考えを深め、表現できる機会を作った。

特に、生命のはじめと終わりにまつわる様々な倫理的問題は、正解が決まっていない難しい課題でもあるため、その問題に向き合うためにも、対象理解と背景にある社会情勢などの理解が必須である。それらのイメージ化を図るためには、ドキュメンタリー動画がもつ効果が大きいと見え、各回のテーマに合わせて

<p>て映像資料を視聴させているが、学生同士の意見交換を経て提出されたレポート等から、様々な問題に対して学生自身が一人の人間として真摯に向き合う姿勢が感じられ、個々の学生の内面的な成長につながったと考える。授業アンケートにおける全体評価のポイントは4.71であった。</p>
<p>教員自身の授業評価</p> <p>項目別回答では、すべての項目が全体平均より高かった。「Q5 自分にとって新しい考え方、発想がもてた 4.71」「Q18 わかりやすい授業だった 4.79」「Q21 授業を受けて満足した 4.79」「Q11 教員の説明は理解しやすかった 4.75」は、特によい評価を得たので、引き続き同様の取組みをしていきたい。</p> <p>自由記載では「生命との大切さを本当に学んだ」「命のありかたを改めて考えさせられた」「映像がとてよよかった」「生命観や倫理観を深められた」などのコメントがあった。改善点に関する意見については、「レポートが多い」1件であった。</p> <p>レポートについては、評価方法をレポート中心で評価することになっているため、各回における学びの内容と質を問うために、多くなるのは必然であるため、その意図を十分理解できるように働きかける必要がある。</p> <p>動画を中心教材としながら、学生の思考を深めていく方法は、ある程度の効果を生んでいると思われる。</p>
<p>これからの授業に対する目標</p> <p>自己学習時間に関しては、授業時間以外の学習時間は、3時間以上3名、2時間～3時間未満3名、1時間～2時間未満13名、1時間未満26名、0時間25名という結果であり、授業外学習時間が非常に少ない現状である。</p> <p>レポート作成は、基本的には授業以外の時間で行わせているが、それでも上記の結果であるため、レポート課題の内容・量等についての検討が必要であると考えます。また、合同授業であっても学生個々の積極的な授業参加を促していけるよう授業方法等も更に検討していきたい。</p>
<p>学生への要望</p> <p>合同授業であることから、クラス別授業に比べて私語が多くなったり、当該科目以外の課題に取り組んだりする学生が多くなるように見受けられるので、一人ひとりが自覚をもって、集中して授業に積極的に参加してほしい。</p>

科目名	看護の理論	科目責任者名	萱嶋 美子	対象・開講時期	2年生・後期
実施状況					
<p>全体として、‘理論は難しい’というイメージが学生にあるので、具体的な看護の状況について理論を用いて説明することを心がけている。ただ、理論を理解するための用語の定義等は大事であるため、初回の講義で看護理論についての概論を話し、続く7回の講義で代表的な理論家の理論について、一回毎に一つの理論を講義している。2回目の講義からは、その日にとりあげる理論について、学生が事前にテキストの概要を整理して授業に臨み、教員が資料を提示して講義をするという形式をとっている。講義の中では、理論に関する事例についてグループでディスカッションした後に発表する時間を設け、理論について自分の言葉で語ることを大事にしている。</p> <p>講義期間の途中で、学生に講義の進め方について確認をとっているが、「グループで話すので、他の人がどのように考えているかわかり、とても勉強になる」や「最初、理論は難しいと思っていたが、実習で体験したこととつながる部分があり面白いと思った」、「事前学習をしてから講義に臨むので、理論の理解が深まる」など、良い反応を得ている。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>この科目は履修人数が少ないこともあるが、授業評価で「Q4 授業中私語なく集中できた (4.67)」（全体評価4.16)、「Q5 自分にとって新しい考え方、発想がもてた (4.67)」（全体評価4.15)と高く、4.5以上が全部で7項目、他も概ね全体平均同等あるいはやや高い結果となっている。中でも、「Q21 この授業を受けて満足した (4.50)」は全体平均4.17より高く、理論は難しいと思われるが、学生の満足度は高かつ</p>					

<p>た。一方、授業評価項目の中で、「Q12 教材（教科書、配布資料、視聴覚など）は適切だった（4.00）」が全体平均 4.13 より低かった。理論の理解を助ける教材の工夫をしているが、今後、さらなる工夫が必要と考えている。また、「Q8 この授業の学習の到達目標は達成できた（4.00）」が全体平均 4.02 より若干低い結果ではあるが、全体を通して、科目の到達目標には概ね到達できていると評価する。終了時の課題レポートでは、学生は理論を学んで、自分が実践していきたい看護について具体的に表現できており、今後の実践につながると期待できる。何より、学生が看護理論を身近に感じられるようになったことが一番の成果だと考えている。</p>
<p>これからの授業に対する目標</p>
<p>ここで学んだ看護理論は、臨床に出てから実践で活用していけるものなので、提示する資料の工夫を重ね、理論に対する学生の理解がさらに深まるようにしていきたい。そして、‘看護っておもしろい’という気持ちと同時に、看護の素晴らしさを実感し、このような看護を実践したいという各自の看護観が深まる授業にしていきたいと考えている。</p>
<p>学生への要望</p>
<p>看護で、こんな時どうすればいいの、と立ち止まってしまいそうになる時、看護理論があなたに患者さんの見方・関わり方の方向性を示してくれます。‘理論は難しそう’と、最初から敬遠しないで、一緒に学んでみましょう。</p>

科目名	基礎看護学実習Ⅱ	科目責任者名	山口 由子	対象・開講時期	2年生・前期
実施状況					
<p>学生編成は1グループ5～6名で、教員は学生の状況に応じて1～3病棟担当した。学生は、臨床指導者や教員のアドバイスを受け、受持ち患者の看護過程を展開し、生活過程を整える看護技術を実践できた。病態の知識不足が挙げられたが指導者からアドバイスをもらい、看護実践を通して個別性について考え理解することができた。最終的に実習を通して、看護について学生個々が考え、看護観を深めることができた。</p> <p>事前学習は、オリエンテーション前から動機づけを行った。患者への実践レベルまで到達は難しいが、積極的に練習を行っていた。日々のカンファレンスの運営方法は指導が必要であった。合同カンファレンスは手引きをもとに指導を受けながら資料を作成し発表した。資料作成の時間を十分とれたので、カンファレンス前に資料に目を通し、効果的なカンファレンスが行えた。</p> <p>新しい経験や生活環境の変化、緊張感から感情のコントロールが難しい学生もおり、指導や対応に時間を要した。</p>					
教員自身の授業評価					
<p>結果のポイントは4.76、個別の項目で見ても、4.56以上であり実習評価は高かった。「Q3 まじめに意欲的に取り組んだ4.81」「Q4 新しい考え方、発想がもてた4.85」「Q22 全体的に満足できるものだった4.81」と得点が高く学生自身が意欲的に実習に取り組んだことが示されている。「Q10 受け入れ態勢が整っていた4.78」「Q12 指導者の指導が理解しやすかった4.85」「Q14 指導者は、話しやすい雰囲気を作っていた4.83」が高く、病院の実習受け入れ指導体制が整っており学生の学びを促進するものであったことが分かる。学生の自由回答から「教員・指導者が優しく、個別に指導された」「相談すれば親身になって話を聞いてくれた」ことから初めて看護過程を展開する実習であるが教員と指導者が実習目的を達成できるように学生個々に指導できていたことが伺える。また、実習を通して学生自身も成長し、看護を理解すると共に自らの看護観を深めることができていた。</p>					
これからの授業に対する目標					
<p>基礎看護学の教員は2～3病棟、12名の学生を担当した。学生のアンケート結果からも分かる様に病棟の指導体制は整ってきているが教員が担当する学生が多く、患者のケアに入れられない状況もあった。また、精神的に実習に適応するのに時間を要する学生の指導や対応に時間を取られると、他の学生の指導を行う</p>					

時間が制限された。したがって、基礎看護学の教員が担当する学生が多くなりすぎない様に教員の指導体制を整えていく必要がある。

学生への要望

患者に看護技術を初めて実施する実習なので、事前に実習室で必要となる看護技術の練習を十分に実施してほしい。また、患者に看護過程を展開する初めての实習なので、学内での学習に真剣に取り組み、基礎的な知識を身につけておく。分からないことはや困ったことは早めに教員に相談して下さい。